令和４年度　学校評価総括表　伊丹市立こうのいけ幼稚園

R5.3

教育目標	豊かな心をもって、生き生きと遊ぶ子供の育成
重点目標	安全・安心な教育環境のもと、「子供主体」の遊びを支え、子供の主体性を育む教育を推進する

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	生きる力の基礎を育む	主体性の育み	・子どもが遊び込む姿を捉え、内面の育ちを支える保育を進める。	・子どもが、遊び込む姿を捉えたエピソード記録のカンファレンスを１学期に１回ずつ、２学期に２回ずつ、３学期に１回ずつ行い、子どもの内面の育ちについて学びあう。 ・日々の園庭環境の構成の中で、教師間の連携を図り、遊び込む姿につながる遊びの環境を整える。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子ども達の意欲や主体性が育まれるように努めている」「子どもは、幼稚園で『遊び込んでいる』と感じる」「子どもに経験させたい遊びを工夫して取り入れていることをドキュメンテーションやクラスだよりから感じられた」と回答した割合が、それぞれ８５％以上になる。	A	・子どもが、遊び込む姿を捉えたエピソード記録をもとにしたカンファレンスを、１学期に１回ずつ、２学期に２回ずつ行うことができた。３学期には３月中に予定している。その中で、子どもの育ちや学びを捉え、職員間で学び合うことができた。 ・日々の環境構成を行う際に、各学年の遊びの情報交換を行い、教師同士の連携を取りながら必要な環境の構成を行うことができた。 ・保護者アンケートにおいては、それぞれ、９７%、９６%、１００%の肯定的な回答を得ることができ、保育への理解を得られた。	・幼児の主体性を育むために、今後も幼児の興味関心や自発的な遊びから、内面を理解し、環境の構成をしていくようにする。また、教師間のカンファレンスを大事にし、共通理解を図りながら進める。 ・「遊び込む幼児の育成」に向けて、研究推進していく際、共同研究園体制を生かす。	・幼児理解につながるエピソード記録の取り組みは素晴らしい。教師が共有することで、幼児の主体的な活動につながる。 ・教師の内面理解、寄り添う姿勢がよい。 ・幼児自身が考え行動することで、主体的になり自己を発揮できることは、取り組みの成果である。
		自然とのかかわり	・子どもが四季を感じ、興味関心をもって自然に関わることができるよう、季節や学年に応じた栽培計画を立て、園庭の環境を整える。 ・身近な自然事象について興味・関心が深められるよう、発達年齢に応じた環境を準備し、子どもの興味関心や探究心に寄り添う。	・一年を見通した栽培計画のもと、園庭環境、花壇を計画的に整える。 ・年齢に応じた図鑑や絵本等、視覚的教材を準備し、子どもが自然物と関わり思考力、探求心を働かせる姿が増える。 ・保護者アンケートにおいて、「子どもは、自然への興味・関心が深まっていると感じる」と回答した割合が、８５%以上になる。	A	・葉や草花など園庭で遊びに取り入れられるように、子どもの手の届く場所に置き、園庭の環境を整えた。 ・草木や花、虫や天気や気温、雲などの自然事象について、図鑑で調べられるように、各クラスの図鑑やテラスにも置き、自由に好きな遊びの時間に見ながら調べられるような環境を整えたことで、好きな遊びの時間に友達と調べたり、観察したり、異年齢で教え合う姿などが見られた。 ・月刊絵本や、持ち運びはできる個人図鑑の教材を取り入れたことで、季節ごとに自然に自ら触れ、自然に興味関心をもつ姿が多く見られた。 ・保護者アンケートにおいては、９７%以上の肯定的な回答を得られた。子どもが園庭や身近にある自然環境に興味関心を広げ、豊かな体験が行えたと評価した。	・季節の草花など自然物や虫などの生き物に興味関心をもって取り組めるように、引き続き図鑑などの教材を準備する。 ・四季を感じられるように、園庭や花壇の整備などを行う。 ・教師自身も自然事象に興味をもち、環境を準備し、保育の中に取り入れ子ども達がさらに関心を深めていけるようにする。	・幼児を取り巻く環境を整え、安心して遊べる環境の工夫は、意欲向上にとても大切である。 ・自然環境に対し、興味をもたせ、体験できる取り組みは素晴らしい。 ・四季を感じられる環境づくりが、幼児自ら図鑑などで調べるなど、探究する姿となっている。
	一人一人を大切にする教育	すべての子供のための教育推進	・一人一人の発達の特性や実態を把握し、支援計画や合理的配慮をもとに少しずつ段階を踏んで目標が達成できるよう支援に努める。 ・職員間においては日々の情報交換に努め、学年を超えた連携と共通理解を図る。 ・保護者の抱える子育ての悩みには丁寧な傾聴を心掛け、保護者に寄り添いながら家庭との連携を図る。 ・必要に応じて外部機関の意見を仰ぐ。	・子どもの発達や特性に応じた、過ごしやすい環境の設定や支援を行うことで園生活を自分の力で進めやすくなる。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、個々の発達や特性に応じた指導を行い、ひとりひとりを大切にした教育を行っている」と回答した割合が８５%以上になる。	A	・子どもたち一人一人が安定して過ごすことができるよう、どの子にもわかりやすい視覚的な表示や心地よく過ごせる環境を整えた。環境を整えることにより自分で生活を進めやすくなった子もいた。 ・保護者の抱える子育ての悩みには丁寧に傾聴を心掛けた。そのことで不安や悩みを打ち明けられた保護者もいた。話すことで気持ちが楽になる機会になったようだ。今後も保護者への寄り添いと傾聴は大切にしていきたい。 ・研修会には積極的に参加し、また外部機関の専門的な意見を仰ぎ、子ども理解と環境の見直しや関わり方の改善に努めた。 ・保護者アンケートでは肯定的な回答の割合が９８%であった。しかし、当てはまらないという意見も少数あり、しっかりと受け止めたい。	・一人一人の幼児の思いや願いに寄り添う姿勢を大事にすることを基本とし、保育実践を進める。 ・配慮を要する幼児の支援に関しては、視覚教材等を幼児の興味関心や実態に応じて活用していく。また、その保護者との連携は、今後も傾聴し寄り添う姿勢を大事に図っていく。 ・にじいろ保育における保護者懇談会を、定期的に実施する。	・幼児一人一人の思いや願いに寄り添う姿勢は大切である。引き続き、幼児理解に努めてほしい。 ・一人一人を大切にした取り組みは、労力と時間を要するが、そこに意を注いでいることを評価したい。 ・個に応じた保育や保護者の悩みに応えてもらう機会は大切である。 ・保護者研修会は、にじいろ保育にかかわる保護者のみならずみんなに広げてもよいか。
豊かな心・健やかな体	思いやりの心の育成	生命の尊重・道徳性の芽生え	・飼育や栽培を通して、生き物や自然を身近に感じ世話をすることの喜びや、いのちあるものを大切にする気持ちを育む環境を構成する。 ・自然な形で異年齢のかかわりが生まれるような環境づくりを行い、幼児がいろいろな人とのかかわり方を知ったり、やさしい気持ちや感謝の気持ちに触れたりする。 ・教師の道徳性を高め、人権について意識をもつ。	・栽培物の水やりをすすんで行ったり、うさぎや昆虫など飼育している生き物をいたわったりするなど、大切に思う気持ちをもってかかわる姿が増える。 ・日常の生活において、様々な場面での異年齢のかかわりが増える。 ・人権について教師間で話し合うことや、研修会等に参加することを通して意識を高める。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、誕生会や飼育栽培活動、身近な自然環境を取り入れた保育活動等、命にふれる機会を設け、命の大切さを感じさせている」「子どもは幼稚園で『人とのかかわりの中で感謝の気持ちや相手に思いやりの心をもってかかわれる子』に育っていると感じる」と回答した割合が、それぞれ８５%以上になる。	A	・幼児の関心に応じた飼育活動を行い、命のつながりや生命の不思議に触れる機会がもてた。 ・異年齢でかかわりあうことを教職員同士が意識し、互いの遊びに関心をもち、参加しあう機会が増えた。そのような経験の積み重ねにより、憧れの気持ちを抱いたり、相手に合わせたかかわりを行ったりなど、様々な人とのかかわりを経験することにつながった。 ・幼児が誕生会の中で、命のつながりや両親や周りの大人から愛され、育まれている命の大切さに気付く機会を設けた。 ・人権研修会に参加し、教師自身の意識改善に努めた。また、各学年の幼児の実態に応じた人権を考える学級懇談会を行い、保護者とともに人権意識を高めた。 ・保護者アンケートからは、両設問共に98%以上の肯定的な回答が得られ、命の大切さや互いを思いやる道徳性の芽生えが培われていると評価された。	・季節や年齢に応じた栽培を取り入れ、幼児が世話をしながら、命の育みを実感できる環境づくりを引き続き行う。 ・日頃から異年齢でのかかわりを大切にした保育活動の工夫を継続する。 ・誕生会や飼育活動を通して、いのちの大切さや愛情を感じられるよう、年齢に応じた保育活動を工夫していく。 ・今後も教師自身の道徳性を磨き、人権感覚を高めるため研修会に積極的に参加する。また、日々の保育において、個々を尊重したかかわりに努めていく。	・季節や発達の課程（年齢）に応じた飼育栽培活動は、大切な取り組みである。 ・誕生会を通して、親子の命のつながりや命の大切さ、感謝の身持ちや思いやりなど、人との関わりにおいて豊かに経験させる取り組みは、努力していることを評価する。 ・うさぎの世話や、植物の栽培活動など、幼児自身が園の環境整備に取り組んでいて意識する姿が見られた。 ・栽培活動は評価するが、実際に食することができれば、なお、よかった。

開かれ信頼される学校園	健やかな体作り	基本的生活習慣の確立	・親子で取り組む「げんきカレンダー」を実施し、カレンダーを通して、各家庭と連携を取る。 ・定期的に健康に関する話を聞く。 ・病気や感染症等から身を守る方法を知らせ、子供が自ら予防しようとする。	・保護者アンケートにおいて「『ほけんだより』や親子で取り組む『げんきカレンダー』は、健康な生活を意識する機会となっている」「子供は、「基本的生活習慣や健康な生活について、意識をもち自ら取り組もうとする姿が見られる」と回答した割合が、それぞれ８５%以上になる。 ・健康に関する情報を、ほけんだより等で家庭へ啓発する。	B	・幼児期に身につけるべき生活習慣を「げんきカレンダー」の目標にし、それに応じたほけんの話をすることで、子ども自身が取り組みやすいようにした。 ・「げんきカレンダー」の家庭での取り組みの様子を参考にできるように、一部をほけんだよりで紹介したことにより、取り組み方法を工夫された家庭が増えた。 ・アンケート結果では 85%以上となり、基本的生活習慣の確立に向けた実践が評価された。 ・感染症対策では、消毒、手洗い、マスクの着用など、感染予防の指導、実施し感染症予防に努めた。	・幼児期において、基本的な生活習慣の確立は、家庭との連携が重要となる。今後も、「げんきカレンダー」やほけんだよりを活用しながら啓発に努めていく。 ・幼児には、自分の健康に関心をもち、基本的な生活習慣の確立に向けて取り組めるよう、機会を捉えて指導することを継続し工夫していく。また、感染予防についても同様、指導に務める。	・基本的な生活習慣の確立は、家庭によるところが大きい。また、このことが、様々な活動のベースとなる。 ・新型コロナウイルス感染症対策の取り組みにおいても評価する。 ・今年度の元気カレンダーから教師が一生懸命考えて取り組んでいることがよくわかった。 ・取り組みにくい家庭には、目標設定を変える等個別対応の工夫はどうか。
	教育活動への理解の推進	家庭・地域との連携	・子供の学びを可視化できるようなドキュメンテーションの作成と掲示を行う。 ・日頃の園生活や子供の学びや育ちについてのホームページを月３回以上更新し、積極的かつ継続的に園の情報を発信する。 ・小学校との連携・交流を図る。 ① 校内研究会への参加、園内研究会への参加呼びかけ等、教師間の連携を進め、互いの教育について理解に務める。 ② 幼児・児童、双方にとって教育的価値につながる交流活動を探る。	・園前の掲示板は月１回程度、各クラス保育室周辺にもタイムリーに、子供の遊びの様子、その学び等を分かりやすく知らせ発信に努める。 ・ホームページの更新は、ICT 担当者を中心に、園務日程に位置づける等計画的に実施していく。 ・保護者アンケートにおいて、「園だよりやクラスだより、ホームページや掲示ボード、ドキュメンテーション等は、幼稚園での行事や活動の様子、園の教育方針、子供の学びや育ち等を知るのに役立っている」と回答した割合が、それぞれ８５%以上になる。 ・小学校の研究会に積極的に参加し、小学校教育の理解に努めると共に、幼児期と児童期の学びのつながりを学ぶ。また、「遊び込む子ども」を育成するために、主体的な授業改善から保育実践を工夫する。 ・幼児にとって、学びが深まる活動については、小学校の場を活用したり、児童との交流を計画・実施したりする。 また、その価値を保護者や地域に発信していく。	A	・園前の掲示板は、計画通り月１回程度更新することができた。また、保育室周辺のドキュメンテーションは、園の教育活動を保護者へ発信、理解を求めるよい機会として活用することができた。 ・ホームページの更新については、今年度前半期は、定期的に更新することができなかった。後半期は、ICT 担当者を中心に計画実施するよう努めた。 ・保護者アンケートにおいては、９７%と、肯定的な回答を得られた。 ・小学校との連携・交流においては、積極的に実施することができた。 ① 校内研究会へは、毎回、参加し、小学校教師と同じ場で学ぶことができた。また、市内研究会においては、双方に参加し合うことができ、学び合う風土づくりに務めた。 ② 幼児にとって、学びが深める実践交流を実施することができた。 （やご救出、小学校特別活動：SDGS、給食交流会、学校探検　等）	・掲示板の更新は引き続き実施する。 ・保育室周辺のドキュメンテーションは、各保育室に設置した補ワートボードも含め活用し、よりタイムリーに発信するよう努める。 ・ホームページの更新は、ICT 担当者を中心に、計画的に年間を通して教育活動をタイムリーに発信していくよう努める。また、タブレットによる動画配信や参観日等の機会を通して、教育活動の意義や幼児の育ちにも着目できるよう発信の仕方を工夫する。 ・小学校との連携・交流に関しては、「幼児期から児童期の滑らかな接続」をめざし、より一層学ぶとともに、その学びを本園の教育実践に生かせるように、職員間の共通理解を図り進める。 ・幼児・児童の交流については、今後も幼児の学びにつながることを意識し、計画実践していく。また、保護者や地域への発信については、啓発紙、園だより等で工夫していく。	・園前の掲示板において、月一回程度更新されていることは、園での取り組みの様子がよくわかった。 ・それぞれの校種の取り組みを知ることは大切なことである。校種間を超えた学びの場づくりとなっている。 ・ホームページの更新はタイムリーに情報発信できるツールである。「園だより」「クラスだより」と、情報法発信において、業務改善の観点からホームページの一本化を図れないか。 ・ドキュメンテーションは、タイムリーで保護者として喜んでいる。 ・クラスごとにホワイトボード、掲示板を作ったことは、保育の様子を知る機会が増えた。また、動画配信など教師の負担になっていないか。
	安心で安全な園作り	危機管理の徹底	・毎月１回安全点検し、危険箇所は写真を用いた可視化をして共通理解を図り、破損や危険箇所（設備・害虫等）があれば速やかに対応・改善する。 ・遊びの中での危険やけがを防ぎ、安心・安全に幼稚園生活を送れるように、危険箇所を報告しあい、職員全員で共通理解且つ改善に努める。 ・学校安全計画、事件事故への対応マニュアル及び防災計画、洪水時の避難確保計画を職員全員で確認する。 ・様々な事象を予想した避難訓練（洪水、火災、地震、防犯）・通報訓練（火災、県警ホットライン）を実施する。 ・緊急メールを活用した緊急時の保護者への連絡と引渡しの訓練を実施する。	・計画と子供の実態に即して園児への安全指導（日常の生活、幼年消防クラブ活動、交通安全指導含む）を行う。 ・年４回避難訓練及び通報訓練を実施し、反省点を踏まえて実践につなげるとともに、マニュアルや各計画を見直す。 ・職員の危機管理意識を強化するため、日常ヒヤリハットを迅速に伝達し合い、改善策を素早く話し合う。 ・安全カード、一斉メールを活用した保護者への連絡と引渡しの訓練を実施し、実情に応じた対策を検討する。 ・破損や危険箇所の改善に向け迅速な対応を行う。 ・幼児が安全に過ごすことができる安全点検、日々の環境設定を見直し、子供への指導の機会を増やす。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、安全を意識した改善を行い、遊びを通して学ぶ場として、子供が活動しやすい環境を整えている」と回答した割合が、８５%以上になる。	B	・幼児の実態に応じて、指導方法等を工夫し、幼児自身が安全を意識できるように、環境を通して働きかけた。５歳児においては、幼年消防クラブの組み替え式や交通安全教室の実施を通して、意識向上を図ることができた。 ・避難訓練では、幼児が「命を守る」ことを意識できるように、視覚教材等を活用し、事前事後の指導と、避難訓練時の総括において工夫した。 ・安全カードの実践的活用を緊急メールの活用を今年度の引き渡し訓練において、実施することができた。 ・毎月の安全点検を実施するとともに、必要に応じて、施設管理において、危機意識を高めるよう職員間で共通理解を図るよう努めた。 ・保護者アンケートにおいて、９４%以上の肯定的な回答が得られた。	・自転車通園をする幼児が増え、歩く経験が日常生活において減少している。交通ルールを守る意識を幼児だけでなく、保護者へ効果的に啓発していく工夫が必要である。PTA と協力し、意識向上を図っていく。 ・施設管理において、より、職員の危機管理意識の向上を、機会を捉えて図っていく。また、幼児が安心して思う存分遊べる環境づくりにとして PTA と協力して環境整備に努める。 ・幼児の実態に応じ、臨機応変に避難訓練を実施するよう進める。	・安心・安全に係る対策は、多く予測できない状況から突如生じる危険に対し、行動が取れるかに係っている。そのためには、危機管理のための意識向上、体験、訓練が必要である。 ・遊具の老朽化が進んでいるように思う。特に木製遊具の点検は必要かと考える。 ・PTA 活動において、「美化サークル」が、環境整備に協力していた。また、会員全員での清掃では、年度末だけでなく、年 2 回あってもよいのではないか。

学校関係者評価総括
・幼稚園が取り組まれていることを全般的に評価した。しかし、幼稚園業務において、多忙極まりない様子がみて取れる。「スクラップ・アンド・ビルド」の方針で、新たな取り組み、不必要な事業など、見直しを図り業務改善にも努めてほしい。
・公立幼稚園のよさをアピールしてほしい。保育の素晴らしさ、幼児に寄り添う姿勢、保護者同士のつながりなど、保護者や地域に発信してほしい。

次年度に向けた重点的な改善点
・仕事を楽しくやりがいをもって取り組むことが、ひいては幼児の発達に関わってくる。コロナ禍で事業の見直しを図らざるを得なかったが、再度、幼児の育ちに必要なもの、不必要なものを検討し教育実践を進める。

自己評価の基準　　Ａ：目標を上回った　Ｂ：目標どおりに達成できた　Ｃ：目標をやや下回った　Ｄ：目標を大きく下回った